

会議名	平成 16 年度問題別検討会・関東畜産学会大会シンポジウム
開催日時	平成 16 年 10 月 27 日(水)
開催場所	山梨県巨摩郡大泉村八ヶ岳ロイヤルホテル
主催者	(独)畜産草地研究所・関東畜産学会
参加人数(概数)	約 100 名
1. 会議の概要 (500～1,000 字 程度または議事 内容の資料添付)	<p>農地を保全し、農業を発展させるためには今後の主たる担い手になる就農者へ渡せる農業の形態を提案し、技術的に支援することが重要である。中山間地では林野と耕作放棄地の活用、都市近郊部でも耕作放棄地の利用の提言も必要である。新たな視点をもって放牧を取り入れながら、地域の活性化を目指す研究を推進してきた 4 人の講演をもとに、畜産を含む農業の今後の展開方向を検討した。</p> <p style="text-align: right;">(別添の研究会資料参照)</p> <p>(1)「自然共生農業システムにおける家畜の役割」 松木 洋一(日本獣医畜産大学)</p> <p>日本においては環境保全型農業が政策として推進され、有機農業が市場社会化されようとしているが、生物多様性を保全することを経営事業部門とし、その保全活動が実現する構想はこれからである。この構想に近い政策目標を作りつつあるEUの自然管理農業政策と実態を比較考察すると共に、日本における自然共生農場の先進事例を分析して今後の振興課題を提起した。①自然共生農業システムの概念と経営論理、②EUにおける自然管理農業の展開、③日本における自然共生農業システムの先進事例、④自然共生管理農場実現の課題、について話題を提供。</p> <p>(2)「中山間地域の耕作放棄地における肉用牛の放牧利用」 畜産草地研究所山地畜産研究部 小山 信明</p> <p>①耕作放棄地の発生要因②小規模移動放牧を支える技術、③小規模移動放牧の運用(長野県御代田町)、④小規模移動放牧による地域の活性化、⑤今後の研究の展開方向、について話題を提供。</p> <p>(3)「奥山国有林の無牧柵肉用牛放牧利用システムの提案」 畜産草地研究所放牧管理部 佐藤 衆介</p> <p>次世代に渡すべき森林利用システムは、森林にある豊富な野草資源を畜産的に利用しながら、森林の本質的価値を保存する利用方式と考えられる。すなわち、森林を原型のまま利用し、非人工草地化の野草利用の無牧放牧が有望といえる。①林内にはどれほどの飼料資源が存在するのか、②ウンは林地をどのように利用するか?(なお、ここで演者が紹介しているGPS利用によるウンの行動調査結果は、演者が東北大在職中に当協会が平成 12・13 年度に委託した課題による研究成果である)。さらに③持続的混牧林システムを提案した。</p> <p>(4)「市民参加農園におけるヤギ放牧を用いた耕作放棄地の再生」</p>

	<p style="text-align: right;">茨城大学農学部動物生産科学科代講座 安江 健</p> <p>①はじめに市民参加「のらつく」農園の実際を報告、②茨城県および阿見町における耕作放棄地の現状、③市民参加農園「のらつくす」の出現と現況、④「のらつくす」へのヤギ導入の経緯、⑤耕作放棄地を用いたヤギ周年放牧システム確立に向けた現況、⑥ヤギ飼育が「のらつくす」構成員および地域住民に及ぼす効果、⑦今後の展望と課題、を述べた。</p> <p>(5)総合討論</p> <p style="text-align: right;">司会;渡邊 誠喜(東京農業大学)・佐藤 衆介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山梨県の林間放牧事例の紹介(酪試) ・畜産研究のあり方について; ①消費者の有機畜産選択に対応した畜産全体の転換、総合的土地利用、地域性による土地利用計画モデル(山村)の作成。 ②他の作目との連携、輪作の中心に畜産を。 ③総合化の中での畜産、芽を育ててモデルを構築。 ④粗放化の限界。 ⑤林畜実験牧場(北上山地)撤退の原因⇒若い人で担えるシステムの構築、技術システムの提案。 ⑥・経済活動なのだから”儲けること“が大切。⑦生産した家畜生産物(ヤギ乳、鹿、ダチョウなど)の出口の研究・構築が必要。 <p>以上のような点について討議された。</p>		
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	3. その他の発表課題で関心のあったもの	4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	特になし。
報告者	針生 程吉		